

手づくりの温かさで 現代世界を伝え、考える

子どもたちの感性を育てながら、国際理解教育を実践。
しかも楽しく、わかりやすく。そんなミュージアムを訪ねた



あーすキャラバン隊は県内の学校で出前ワークショップをおこなう(提供・あーすぶらざ)



本郷台駅近くにあるあーすぶらざ(提供・あーすぶらざ)

声をかけ、これから始まるイベントの準備にせわしく働くボランティア・スタッフと「言葉を交わしながら、展示物の位置を直していく。ボランティア・スタッフも準備の手をしばし休め、来館者に笑顔で話しかけている。三階の企画展示室で開催される「地球の食卓 写真展」の準備は、キヤブションの作成・取付けから照明の調整まで、ほとんどがスタッフによる「手づくり」だと友人は再三温かさが展示だけでなく、スタッフ

緩やかな傾斜のアプローチから建物内に入ると、吹き抜けのアトリウム立つと、SF映画に登場しそうな近未来的な建物が、東側に近接して見える。「あーすぶらざ」の愛称で親しまれている「地球市民かながわプラザ」である。ここで働く友人が関わった企画展の見学のため、今回初めて訪れたのだが、せっかくだからとその友人が施設内を案内してくれた。

展示場は国際交流の場

の入館者への接し方から伝わってくる。それはまた、フードマイレージに関するワークショップ、各国の料理セミナー、食材の生産から消費までを考える講演会や映画会など、多彩な関連イベントの企画や運営にも

の民族衣装で話に聞き入っている子の来場者に紹介していた。あーすぶらざの職員が子どもたちの視点に立って進行役を務め、数名のボランティア・スタッフがそれをサポートする。事前に着せてもらったモンゴル

お互いの手の温もり

友人は、ネパールの「アニサちゃんの家」に入つて遊ぶ小学生三人組になげる「かべ新聞」の制作・配布、ウトリーチ事業としての出前ワークショップなど、外に向けての活動も積極的に展開している。未来の建物のなかでは、さまざまな「手づくり」の企画が次から次へと生まれている。

ム「地球の広場」がある。ここは一階に位置し、常設展示室へはエレベーターで最上階の五階まで上がる。常設展示は、想像力を掻きたて感性を育むための「こどもファンタジー展示室」、世界各国の暮らしを生活道具や楽器、衣装などをとおして紹介する

「こどもの国際理解展示室」、日本が経験した戦争や、紛争・貧困・環境といった地球規模の現代的課題について考える「国際平和展示室」の三室から構成されている。



毎月のワールドカルチャー・デイは、世界各地の出身者の話を聞きながらの交流が楽しい

林 勲男
はやし いさお
民博 民族社会研究部

専門は社会人類学。近年は自然災害被災地の復興過程や防災活動について、オセアニア、東南アジア、アメリカ合衆国、日本で研究している。